

了翁

禪師

了翁禪師沒後300年記念誌



咄：此翁

百非曰云能

却是較整系

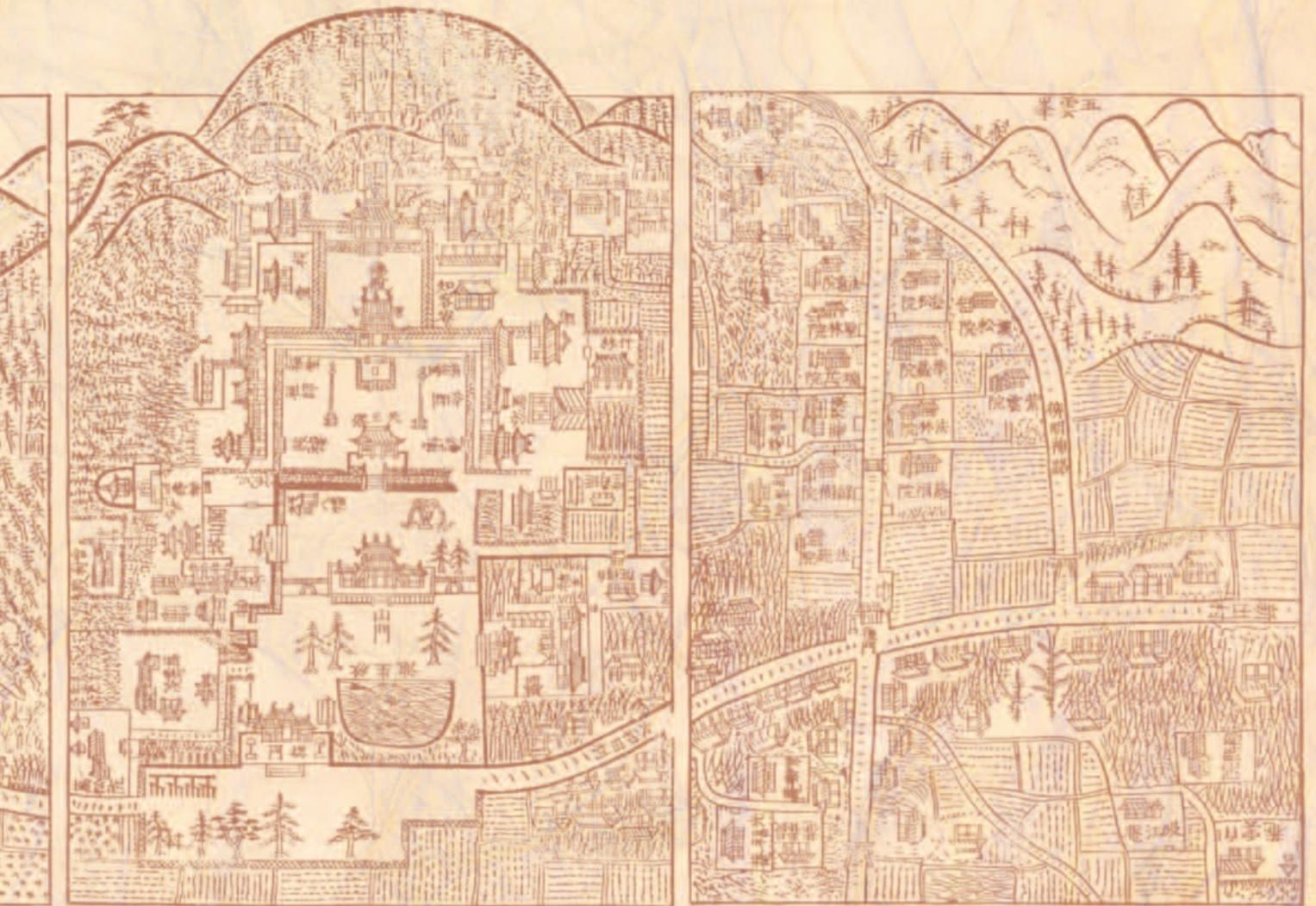
啜咄：又咄

元祿十五年壬午正月朔三日

天真仁筆

請贊

佛國第四代覺了翁老人自題



萬福寺全図（山門右手に了翁創建の天真院、自得院が描かれている）

『黄檗開山国師隠元和尚伝』二巻、元禄14年（1701）

湯沢が生んだ名僧・了翁さん

了翁さん（一六三〇～一七〇七）は、江戸時代に活躍した湯沢市八幡出身の黄檗宗の僧侶です。

2歳で母を亡くし、養子となった先々でも不幸が続き、そのうえとても貧乏でしたので寺にあずけられました。12歳の時、東成瀬村の龍泉寺で生涯の一大転機となる斎藤自得と出会い、出家します。一念発起の修行の後、14歳の春、高い志をいだいて奥羽の山脈を越えて中尊寺を目指し、そこで一生をきめる大蔵経（一切経）の収集という大願を立てました。

そして故郷をはじめ全国各地の寺社で厳しい修行を重ね、25歳の時、中国から渡来した明の高僧・隠元禅師のもとで求道に励みました。

しかし、病を患い修行も思うにまかせず、煩惱の根源であるとして自分から勢を断つなど、決死の荒行まで行いました。33歳頃のことです。

ところが、その後遺症に大変悩まされました。しかしある晩、明から来た如定和尚が夢枕に立ち、霊薬のつくり方を伝授しました。その効力に驚いた了翁さんは、浅草観音堂におまいりして、「錦袋田」と名づけ、広く人々のために役立てようと考えました。上野の不忍池のそばに薬舗をかまえ、店を縁者の大助にゆだねました。

当初、僧侶が商をすることは、と云って非難する人もいましたが、やがて大評判となり、たくさん



三百年了翁禅師木像（濱名徳永師寄贈）
（慈眼寺蔵）



目次

湯沢が生んだ名僧・了翁さん	2
了翁禅師の故郷	4
了翁禅師ゆかりの寺院	6
霊葉錦袋円	8
公開図書館の創設	10
了翁禅師が大蔵経を寄進した21ヵ寺	12
了翁禅師同時代評	13
湯沢の黄檗宗	14
了翁禅師の最期	15
了翁禅師の一切経寄進について 弘前大学人文学部准教授 渡辺麻里子	16
了翁禅師年譜	17
紙しばい「了翁さまものがたり」	18

臨済正宗
咄々此翁
百非百無能
却是較些子
啾啾又啾
元禄十五年壬午正月初三日
天真仁峯禅人 請贊

佛國第四代覺了翁老人自題
之道印
了翁氏
（筆者印章）
三傳世
高元

表紙の翻刻

の利益をあげることになりました。了翁さんは、ついに念願の大蔵経を買い求めることができました。

41歳のとき、大蔵経はまず上野の寛永寺に寄進され、その後二十四年もかけて、天台・真言・禅と三宗の計二十一寺院に納められました。仏教の教学興隆を願った了翁さんの宗派をこえた高い仏教精神がうかがえます。また、孔子や老子も厚く敬いました。

了翁さんは集めた大蔵経の他、日本や中国の万卷の書を多くの人が利用できるようにと、はじめは不忍池に経堂を造り、次いで上野寛永寺境内に勧学講院（学問所）を造りました。

これらは、僧侶ばかりか一般の人も利用できる公開図書館にあたり、大変画期的なものでした。勧学講院では一流の学者の講義や勉強する人のための寮、食事の世話も行われ、こうした費用もすべて了翁さんが負担しました。56歳の時、輪王寺宮大真法親王から勧学院権大僧都法印という大変高い位を贈られました。

了翁さんはまた、江戸の大火の被災者のために寄付したり、孤児をひきとったり、お寺の修造、復興や灌漑工事、たくさんのお観音像や錦袋円の施しなど、社会のために力を尽しました。

自分に厳しく、最後まで質素に、理想を貫いた了翁さんの追善供養の石塔は、弟子によって刻まれ、八幡のお経塚の隣りに静かに立っています。

了翁禅師の故郷

了翁禅師の生まれたところ

了翁禅師は、寛永七年（一六三〇）三月十八日、雄勝郡八幡村（現在の湯沢市八幡）というところで、鈴木重孝の子として生まれました。

江戸時代の八幡村は、雄物川舟運の発達にともない、京塚や落合に河港が築かれ、年貢米の積み下ろしや雄勝一円で消費される物資の流通で栄えていました。



「了翁禅師生誕之地」の碑

昭和62年、了翁の地元研究家・田口大師さんが建てた記念碑です。了翁禅師の業績を紹介する案内板も設置されています。



龍泉寺境内にある剃髮の碑

昭和15年に郷土史家・菊地慶治さんと佐藤恵雲住職によって建てられました。黄檗宗49世玉田老師の揮毫で「了翁禅師剃髮之所」と彫られています。



湯沢市八幡地区の全景

主要参考文献

- 『了翁祖休禅師行業記』貞享2年冬／小弟了源・了観共輯
- 同上 翻刻・論文 渡辺麻里子 アジアの文化と思想第14号／2005年
- 『黄檗天真院了翁禅師紀年録』宝永4年／元善編
- 『仏国了翁禅師開堂語録』元禄15年／仁峯元善編（以上一次資料）
- 近藤甫寛『久保田領郡邑記』寛政12年
- 菅江真澄『雪の出羽路』文化8年
- 『黄檗文化人名辞典』（大槻幹郎他編）思文閣出版／1988年
- 内山純子・渡辺麻里子『曜光山月山寺 了翁奇進鉄眼版一切経目録』月山寺／2001年
- 『黄檗文華』123号／黄檗山萬福寺文華殿／2004年
- 内山純子「近世中期の仏教学興隆に貢献した了翁禅師と禅師の活動を支援した人々」了翁禅師研究会／2004年
- 『講座 図書館の理論と実際10 図書および図書館史』（石井教編）雄山閣／1990年
- 嵩吉靖『了翁禅師』中央仏教社／1921年
- 今沢慈海『了翁禅師小伝』成田山財団／1964年
- 川瀬信雄『名僧・了翁禅師伝』女性仏教社／1990年

出家と修行時代

母を早くに亡くした了翁は養子先や親戚に身を寄せましたが、不幸が重なり寺に預けられることになりました。

はじめ羽後町の吉祥院、ついで東成瀬村の龍泉寺で寺僕（お寺の使用人）として働き、12歳の時、剃髮して出家しました。了翁は後年の名前で、『了翁禅師紀年録』では、はじめは了然と名乗ったとあります。

龍泉寺の和尚のもとで二年の間厳しい修行をしたのち、14歳の了翁は行脚（修行の旅）に出ました。須川越えして岩手に入り、平泉の中尊寺を訪れたのです。

コラム

さいとうじとく
 恩人・斎藤自得

了翁は、はじめ出家を嫌がったといいます。僧侶になるのは、役に立たない人間だと思っていたようです。了翁を諭し、僧侶になる決心をさせたのが、龍泉寺に出入りしていた加賀（石川県）浪人の斎藤自得です。

了翁の夢をかなえた錦袋円という薬も、実は自得が教えたといわれ、自得の子孫に伝わる源田膏薬は、近隣でも有名だそうです。

了翁は、自得を恩人として、父や養父母、伯父母とともに終生慕いました。遷化（死去）するまで住まいとした寺院に「自得院」と名づけたことでも敬愛の念がわかります。現在は天真院に自得の立像があります。

大願を誓った翁
 中尊寺には、奥州藤原氏が奉納した立派な一切経（大蔵経）がありました。ところが了翁が訪れてみると、一切経は散り散りになっていて、了翁が必死に探しても六巻しか見つげることができませんでした。
 仏教が盛んにならないのは、僧侶も一般の人々も仏典を知らないからだと考えた了翁は「一生の間に大蔵経を集めさせたまえ、それがかなわなければならぬ大般若経六百巻を書写させたまえ」と願いました。この大願が、のちの図書館創設や、各地のお寺への大蔵経寄進に発展したのです。



了翁杉の伐根

了翁禅師が修業時代に八幡神社で植えた杉苗は、時を経て大木となり、大正時代までその一部が十数本残っていたといいます。現在は失われてしまい、伐採したあと残された根だけが、わずかに当時をしのばせています。



八幡神社（湯沢市八幡字古館）

了翁禅師が参籠した神社。仏教僧の了翁ですが、当時は神仏混淆といって、仏教と神道を融合させた考え方が一般的でした。了翁は各地の寺で修行をしましたが、神社に籠って祈りを捧げることも珍しくはありませんでした。

八幡神社と了翁
 行脚を終え故郷に帰った了翁は、四年近くも八幡神社にこもって丑の刻（今の午前二時頃）詣りなどの厳しい修行を積みまし



八色八筋の旗

了翁禅師が輪王寺宮から賜ったといわれる旗で、菊の紋章が入っています。輪王寺宮は代々寛永寺門跡と天台座主を兼ね、了翁禅師と深い関係がありました。近藤甫寛『久保田領郡邑記』（1800年）では「五色の絹也」とあります。

た。大蔵経は非常に高価なもので、若い了翁が購入できるはずもなく、ただひたすらに神仏の加護を願い、どうしたら大願成就できるのか、その方法を追い求めました。この時了翁は神社の境内に五百余株の杉苗を植え、その根が今でも残されています。
 また了翁はいい伝えによれば、晩年この八幡神社を再興し、輪王寺宮から賜ったといわれる八色八筋の旗、赤地金襴御戸帳、半鐘などを奉納しました。このうち八色八筋の旗は現存し、昭和五十年には湯沢市の文化財に指定されています。戸帳と半鐘は大正時代まで社宝として伝わっていたようですが、現在では不明となっています。

コラム

いんげん おうばく 隠元禅師と黄檗宗

隠元禅師が伝えたのは、中国・明代の禅宗で臨済正宗黄檗派と称しました。明治時代に黄檗宗として、日本三禅宗の一つとなったのです。

隠元禅師の教えは当時の仏教界に刺激を与え、朝廷や幕府の尊崇を得て、黄檗山萬福寺を創建し、末寺も千をこえました。また一方で、仏教美術、建築、その他生活文化に幅広い影響を与えました。煎茶の普及、明風の精進料理、木魚、いんげん豆等々、特に日本の印刷物で最も多く使われる「明朝体」や20字×20行（400字）の原稿用紙も黄檗文化が元になっています。



寛永寺 根本中堂



了翁禅師寿像（寛永寺）

寛永寺（天台宗）
東京都台東区上野。天台宗の関東大本山。勧学講院（学問所）は寛永寺の境内に建てられました。了翁禅師の石像や顕彰碑などがあります。



萬福寺

「山門を出れば日本ぞ茶摘み唄」 菊舎尼



天真院

また萬福寺の塔頭（大寺院の敷地内にある小寺院や別坊）として、天真院と自得院を創建しました。天真院には了翁の頂相（肖像画）や多くの資料が伝わっています。

京都府宇治市。黄檗宗の大本山です。創建した時に了翁が尽力したのはもちろんですが、晩年にも、萬福寺の伽藍の修造や田地の灌漑工事などを行い貢献しています。



武州東叡山勧学講院了翁僧都道行碑記（寛永寺）

元禄5年（1692）建立。了翁の功績を記した顕彰碑（高泉撰文）。寿像とともに、了翁が55歳の時建立されました。



了翁大僧都行業碑序（天真院境内）

了翁が天真院を創建した時、弟子たちが造った彰徳碑です。



仏国寺

了翁は仏国寺を修造し、財政面でも補強につとめ、永代香華料として五百両を寄進しました。なお、日本人として了翁が初めての住持でした。

一・72歳）了翁は、要請を受け師高泉和尚の開山した仏国寺四代の住持となりました。

びつこくじ 仏国寺（黄檗宗）



了翁の頂相（天真院蔵）

それまでの日本にはなかった写実的な画風で、黄檗文化が伝えたものです。

霊薬 錦袋円

■ 荒行と霊夢の薬「錦袋円」

寛文二年（一六六二）、33歳の了翁は、病
気や願いの成就しないことに苦しみ、厳し
い修行をしました。そして欲望を断つため
に自ら身体の一部を切断しました。

さらに翌年には、左手小指を砕き油紙を
巻いて灯をともし、右手に線香を持って般
若心経を二十一回読誦するという「燃指の
行」を断行しました。

適切な医療措置もしなかったとみえて、
これらの傷痕は激しい苦痛を伴って了翁を
苦しめました。

本来大乘仏教では、このような苦行を禁
じています。それだけの翁は必死になって
大願成就を願ったのでしよう。

ある時、了翁が指の傷痕の激痛で身動き
もできないほど苦しんでいると、夢に尊敬
する黙子如定（明からの渡来僧、長崎の眼
鏡橋を造った人）が現れ、薬の作り方を教
えてくれました。

目覚めた了翁がさっそく薬を処方すると
たちまち痛みが取れました。不思議なこと



錦袋円（円）の看板と印刷物

にその処方とは、かつての恩人・斎藤自得
に教わったものと同じだったといえます。

しかし一か月後、今度は下腹部の傷痕が
激しく痛み出しました。すると、またも黙
子如定が夢に現れ、錦の袋から一つの薬味
を取り出し「前の薬にこの一味を加えれば、
万病に効く薬となる。それを用いて大願を
成就せよ」と告げました。

その通りに処方すると痛みは消え去りま
した。大いに喜んだ了翁は、この薬を広め
て多くの人々を救おうと思いい立ちました。

薬の名前は、浅草寺の観世音に祈念して
クジを引いたところ、三度とも同じ
「錦袋円」だったので、この名にしたとい
うことです。

コラム

錦袋円の成分と効能

いろいろ説がありますが、錦袋円の成分は猿胞（阿仙薬）に数種類の生薬を加えて作られました。生薬の中には香りの強いものが含まれ、独特の香気がし、気付けの効果もあったといえます。

主成分の猿胞はタンニン酸を多く含む生薬で、止血・下痢止め・咳や痰を抑えるなどの効能があるそうです。

錦袋円は、旅行には必ず持って行くものとされ、「弥次さん喜多さん」の『東海道中膝栗毛』にも登場します。庶民の間では、特に二日酔いに効くとか、一種の惚れ薬として効果があるなどとも信じられていました。

■ 勸学屋の経営

了翁は「錦袋円」を広めようと関東一円を巡りましたが、なかなか薬効を信じてもらえず、思つよつに普及しませんでした。

そこで了翁は、薬屋を開いて売ることを考えました。僧侶が商売することに悩みましたが、多くの人を救うためだと決心し、寛文五年（一六六五）、上野池之端に薬舗を構えて縁者の大助に経営を任せました。

僧侶が店主の物珍しさと、霊夢の話が広がって、錦袋円は大評判となりました。店舗「勸学屋」は、江戸の名所として大変有名になりました。

コラム

せんりゅう
川柳にみる勧学屋・錦袋円

故郷へは錦袋円をみやげなり

江戸名物として広く浸透していました。

手を出して引張りそうな勧学屋

勧学屋は格子ごしに薬の受け渡しをする独特の店構えで、遊女の客引きを連想させました。

池の端匂う男は籠の鳥

格子造りを鳥籠に見立てたもの。勧学屋の従業員は男子のみで、美少年が多く人気でした。また錦袋円は香りの強い薬だったようです。

格別な知恵で錦の袋入れ

夢で如定和尚が錦の袋から一味を取り出した由来を指しています。

了翁の社会奉仕

錦袋円は飛ぶように売れ、寛文十年（一六七〇）、了翁41歳の時には、剰余金^{じゆうご}が三千両にもなりました。

了翁は、このお金を自分のためには使わず、大蔵経や多くの書物の購入とその活用に投じ、また困っている人々を救うために費しました。

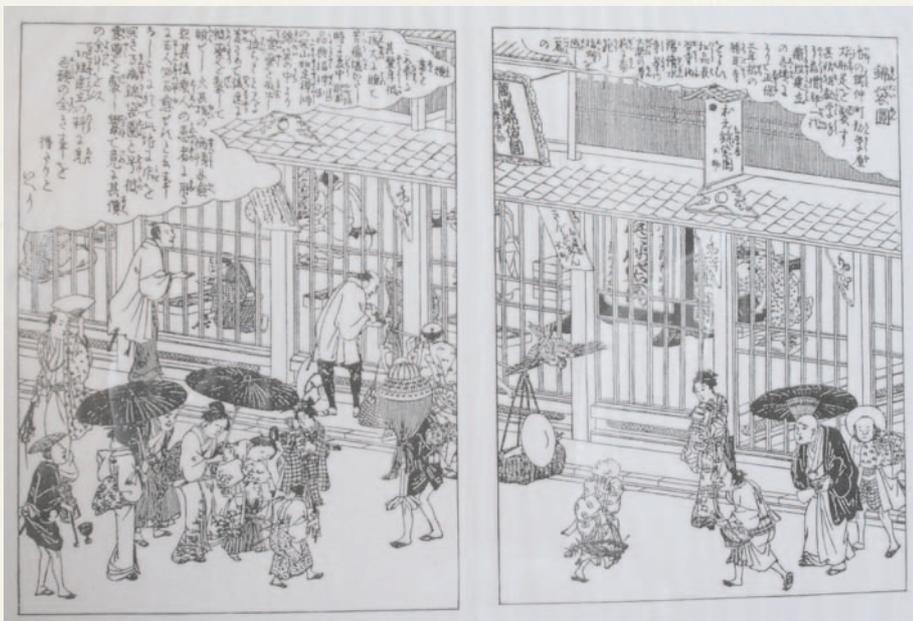
次にそのいくつかの例を紹介します。

■寛文十一年（一六七二）

経蔵完成を記念して伊勢（三重県）安養寺門前に施薬館^{せやくく}を建て、京都の泉涌寺・萬福寺門前でも施薬。合計およそ五万五千袋。

天和三年（一六八三）

前年末の江戸大火で勧学屋が全焼し、収集した多くの貴重な書物を焼失したにもかかわらず、その再建に優先して、被災民のため銭千百貫文の義捐金^{ぎせん}を供出しました。



池之端錦袋円店舗の景（江戸名所図会）

コラム

同業者の妨害

勧学屋の繁盛は、僧侶が商売をすることへの反感もあって、同業者の妬^{ねた}みを買いました。

寺社奉行に訴えられて尋問された時などは、了翁の話に奉行が感嘆し、かえって褒美をもらったこともあり。了翁の毒殺も何度か企てられ、弟子が犠牲になったこともあり。

また、自分こそが元祖だと名乗って錦袋円を売る業者がたくさん現れました。了翁は「生活のために薬を売る人の妨害はできない」と言って、そうした業者を規制しなかったため、錦袋円の販売競争は厳しいものでした。

また餅を配ったり、迷子の親を捜したり、焼死者を埋葬するなどの活動を行いました。

江戸の人々は、了翁を「如来様^{にょらいさま}」と呼んで敬愛したといえます。

■貞享二年（一六八五）

紀州（和歌山県）高野山に向かう途中、錦袋円四千袋を病に苦しむ人に施薬しました。貧しい者には銭も添えて与えたといいます。

了翁は金もつけを目的として商売をしたのではなく、御仏^{みほとけ}の教えである菩薩^{ぼさつ}の行に務めたひとでした。

公開図書館の創設

■ 不忍池の経堂と文庫

了翁は、寛永十年（一六七〇）に天海版「大蔵経」七千巻を買い求め、不忍池の弁天島の南方に小島を築き、経堂を建てて安置しました。錦袋田の利益三千両から三百両を投じたものです。将軍家光と天海が天下の平安を祈願して、全国に大蔵経を一つずつ置こうとして果たせなかった、その遺志を継ぐ一蔵でした。初代輪王寺宮は大変喜んで許可されたので実現したものです。

翌年、二階建ての文庫二棟を建て、内外の教典や和漢の書籍を収めて、講学者が自由に見られるようにしました。堂の中には如定和尚のもたらした三聖（釈迦・孔子・老子）の像を安置しました。

■ 勧学講院の設立

不忍池の経堂と文庫は、火災予防の立場から設けられましたが、反面湿気による被害をまぬがれることはできませんでした。そこで了翁は、再び願い出て寛永寺境内

に広大な土地を賜りました。

天和二年（一六八二）に起工し、貞享元年（一六八四）までかけ、講堂、寮、経堂、文庫などを築いて、仏典、漢籍、和学の書三万余巻を収蔵しました。学僧のためには寮を備え、貧しい人にはお粥もふるまったといえます。

■ 勧学講院の講義

講堂では、輪王寺宮の協力もあって、一流の学者たちが

講義を行いました。午前中は仏教、午後は儒学の講座と幅広い学問を教えたのも特徴です。

「聴聞の僧俗六百余人、笈ヲ負ヒ巻ヲ懐ニシテ朝夕ニ往来出入ス」（行業記）とあって、文庫が付属図書館として一般の人々も利用できたことを思わせます。寺院文庫その他ほとんど非公開の時代において、まことに画期的なことと言わなければなりません。

了翁はまた、勧学講院の維持費として、白銀一千九百八十両を備えました。造るだけでなく、長期の運営にも心を砕いたので

コラム

大蔵経とはなにか

簡単にいうと仏教經典の総称で、一切経ともいいます。西遊記で有名な三蔵法師も、この大蔵経を求めるために旅をしたのでした。

お寺や仏像はどこにもありましたが、大蔵経は何千巻もある高価なものだったので、大きなお寺でもめったに持っていませんでした。了翁はそれを嘆いたのでした。

了翁が天台・真言・臨済の寺に納めた鉄眼版大蔵経は、一寺あたり約6900巻、総計で約12万7000巻余にあよんでいます。



東叡山勧学寮園（江戸名所図会）

コラム

勧学講院のその後

了翁の勧学講院は、元禄16年（1703）の江戸の大火で類焼しました。了翁は、さっそく法親王に再建を申し出ましたが、法親王と幕府は、これ以上了翁に負担をかけてはならないと、幕府の手で再建することにしました。

しかし再建された勧学講院は、かつての公開図書館よりも、天台宗の学舎の性格が強くなってしまいました。

再建された勧学講院も、幕末の彰義隊の戦いに巻き込まれて焼失してしまいました。

現在の駒込高等学校は、了翁を創立者とし、勧学講院を同校のはじまりとしています。

元禄七年（一六九四）、了翁は江戸を離れ、宇治（京都）の黄檗山（黄檗宗の本山・萬福寺のある所）に上り、老後の修行に励みました。はじめ天真院を、のちに恩人の名

■その後の了翁

元禄七年（一六九四）、了翁は江戸を離れ、宇治（京都）の黄檗山（黄檗宗の本山・萬福寺のある所）に上り、老後の修行に励みました。はじめ天真院を、のちに恩人の名

「鉄眼版一切経」を寄進しました。こうして二十一カ寺に大蔵経を寄進して、14歳以来の誓願を達成しました。了翁は65歳になっていました。

この頃は、次第に幕府と藩の封建体制が確立していく時代で、幕府によるお寺や神社への統制も厳しくなりました。寺院でも自由な研究や、まして他宗派の研究は困難な状況にありました。また、儒学を奨励して仏教を遠ざけようとする傾向の強い時代でした。こうしたなかで、東叡山勧学講院のあり方は、改めて仏教学の興隆をはかるうとする革新的なものでした。

了翁は、輪王寺宮や幕府の老中たちの理解と援助を得て、寛永寺境内に新しい学問所をつくることに成功したのです。

■大蔵経の寄進

了翁は、僧侶が学問するのに不便がないようにと、天台・真言・禅三宗の道場に大蔵経を寄進しました。了翁自身も、二学兼



了翁寄贈の大蔵経に刷られた趣意文

了翁は、僧侶が学問するのに不便がないようにと、天台・真言・禅三宗の道場に大蔵経を寄進しました。了翁自身も、二学兼学の僧となつていたことを記しています。

寛永寺には天海版を、瑞聖寺には明版を、そして高野山光台院をはじめ十九カ寺には「鉄眼版一切経」を寄進しました。

こうして二十一カ寺に大蔵経を寄進して、14歳以来の誓願を達成しました。了翁は65歳になっていました。

元禄十五年（一七〇二）には、仏国寺の住持を一年間で法兄の大随和尚にゆづり、翌年には本山に僧侶のための療養所をつくりました。

了翁は一生の間、たくさん寺院やその修造等に、多額の費用を錦袋円の収益から出し続けました。

伝記「行業記」のあとがきには、「我年来錦袋円ヲ以テ、一切経ヲ出ス。一切経ハ、萬病ノ錦袋円ナリ」とあります。

コラム

鉄眼と了翁

鉄眼は隠元禅師がたずさえてきた明版の一切経を、10年余もかかって復刻した黄檗宗の名僧です。整版の黄檗版大蔵経は、大蔵経の普及に大きな役割を果たし、現在でも刷られ続けています。了翁も鉄眼の大蔵経事業に協力しました。

また、社会事業に尽くしたことで知られ、「東の如来様（了翁）」に対し、「西の救世大士（鉄眼）」と呼ばれて敬われました。

よく似た2人ですが、あまり世に知られていない了翁に比べ鉄眼が有名なのは、戦前の国定教科書（国語）に「鉄眼の一切経」として採用されたためだと言われています。

了翁禅師の大蔵経寄進の21カ寺については、研究者が調査中で必ずしも特定されていません。「鉄眼版一切経」の出版元である黄檗山宝蔵院のいわゆる「朱点目録」によると、下の表のようになります。

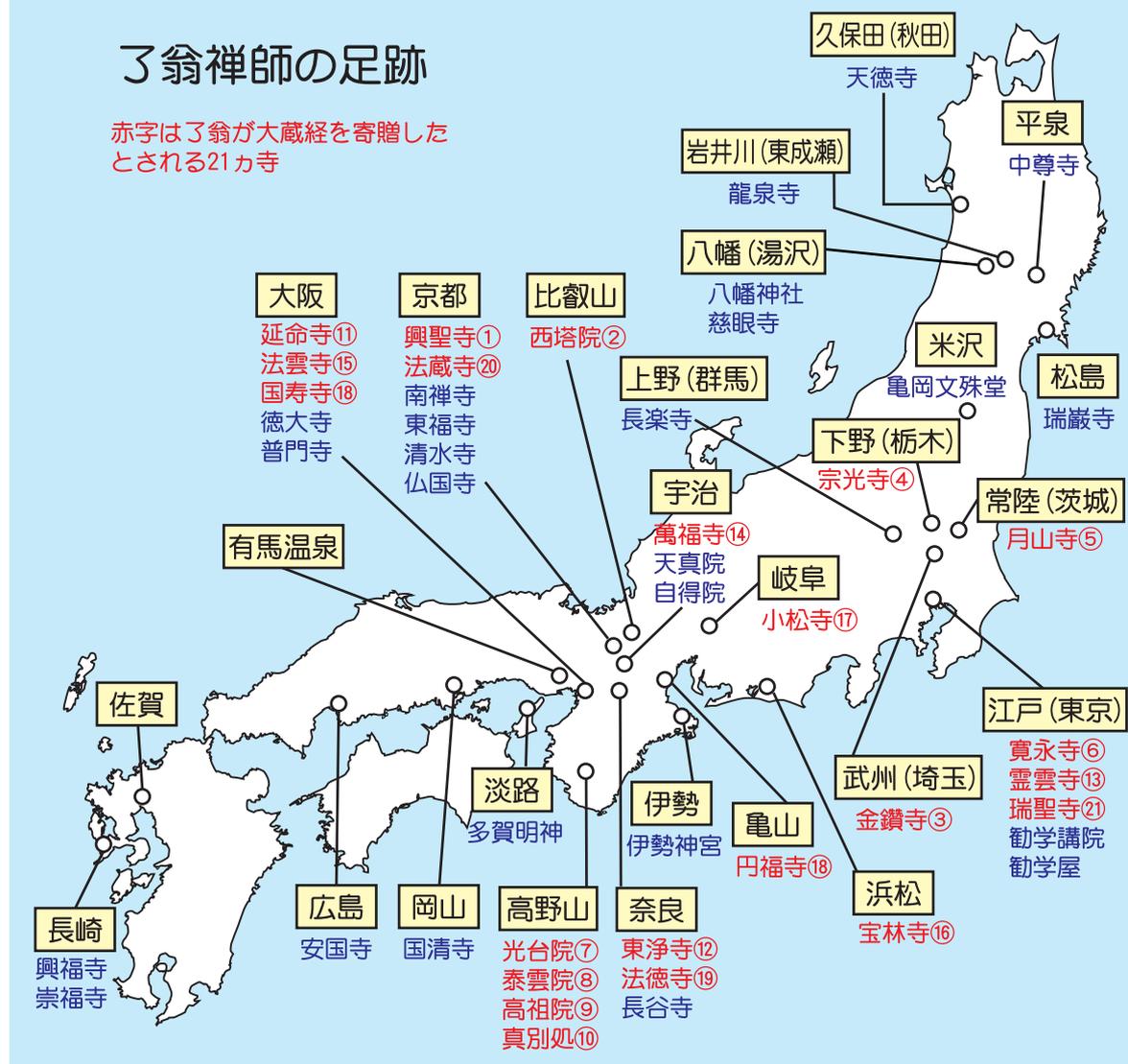
なお、学問の修業道場である関東天台檀林寺院では、大蔵経が有効に活用されていたことが明らかにされています。

禅宗 (禅)					真言宗 (密)					天台宗 (台)					宗							
②① 瑞聖寺	②① 法蔵寺	①⑨ 法徳寺	①⑧ 円福寺	①⑧ 国寿寺	①⑦ 小松寺	①⑥ 宝林寺	①⑤ 法雲寺	①④ 萬福寺	①③ 靈雲寺	①② 東浄寺	①① 延命寺	①⑩ 眞(新)別処	①⑨ 高祖院	①⑧ 泰雲院	①⑦ 光台院	①⑥ 寛永寺	①⑤ 月山寺	①④ 宗光寺	①③ 金鑽寺	①② 西塔院	①① 興聖寺	寺院名
東京都	京都府(京都市)	奈良県	三重県	大阪府	岐阜県	静岡県	大阪府	京都府(宇治市)	東京都	奈良県	大阪府	和歌山県(高野山)	和歌山県(高野山)	和歌山県(高野山)	和歌山県(高野山)	東京都	茨城県	栃木県	埼玉県	滋賀県(比叡山)	京都府(京都市)	所在地
明版		鉄眼版							鉄眼版						天海版		鉄眼版				備考	

了翁禅師が大蔵経を寄進した21カ寺

了翁禅師の足跡

赤字は了翁が大蔵経を寄贈したとされる21カ寺



了翁禪師同時代評

了翁禪師の生きた一七世紀後半、江戸時代の寛永から宝永年間にかけては、江戸幕藩体制が整ってゆく時代です。分けてもキリシタン禁令に伴い民衆支配の根幹となったのが「宗門改め」で、仏教本来の姿から大きく変わる檀家制度を生み出し、現代の「仏教」への道を歩もうとした時期でもあります。また、この時代は江戸期の町人文化の「華」「元禄文化」の、成長から成熟へとつながるときと軌を一にしています。

鎖国令が布かれ、長崎を窓口にした外国の文化移入は、まず中国（明）の「黄檗文化」として、禅様式・絵画・詩文・建築・書道・篆刻等の分野で花開き、江戸都市文化へと醸成されてゆきます。

了翁禪師は二五歳のとき、明から渡来した萬福寺開祖隱元禪師のもとに馳せ参じ、黄檗禅を学ぶこととなります。さらに、了翁禪師が師と仰いだ高僧には、隱元禪師の他に明僧で萬福寺第五代住持の高泉禪師がいます。現在、東京上野の寛永寺には恩師の撰文による『武州東叡山勸学講院了翁僧都道行碑記』が残されています。その中で、高泉禪師は当代の仏教の在り方に疑問を投げかけています。僧侶の姿勢として、俗塵を離れ「飄然自在」の生活と己の高邁な悟りの境地に執着する余り、仏教で重んずべき「衆生済度」を忘れていると指摘しています。

しかし、了翁禪師は「菩薩行」を究めたことよって、世の人々を「無上無等 至真至聖の域」に導き、さらに己の身を挺し、宗派を超越した仏典研鑽・漢学奨励や勸学講院の設立と、

天台・真言・禅の兼学を説いて実践し、仏典の古典ともいえる「大蔵経」の寄進の大願実践に触れ、「僧都（了翁）のごときは本を知るを謂ふべし」と言い、了翁禪師こそは「菩提の本質」を身をもって体得した人だとしています。

それは、了翁禪師の敬愛してやまない明僧・萬福寺第四代住持独漉禪師もまた、「もとより菩薩の行ありて今菩薩の位に居す。諸の衆生を度して菩薩の行を円満にす。」（『開堂語録』跋）と、賛辞を送っています。自らに厳格を課して清貧に甘んじ、宗派にとらわれない本来の仏教興隆と民衆救済に奔走した了翁禪師の生きざまが、そこにあるからだと考えます。

また、萬福寺六代住持の明僧・千呆禪師は、『紀年録』の序文で、「誠に大豪傑たるものに愧ざるなり。」と評しています。少年期の大蔵経収集の発願に端を発し、青年期の修業時代に中国地方以北の曹洞・天台・真言・臨済・黄檗の寺々を遍歴する。さらには反大乘的な苦行の果てに「菩薩行」を体得する。それによつて、「道場を各所に建て、蔵典を諸刹に安ず。世の謂ゆる美事といふもの皆勇んで之を為さずといふことなし。」と云つ実践力を支え、強靱な意志と難行苦行に耐えた身体への、法姪千呆禪師の驚嘆からくるものではないでしょうか。

肝胆相照らす仲であった法孫の道香禪師は、今のご時勢において「願行兼ね全き人」を探し求めようとすれば、了翁和尚こそその人である、と『紀年録』上梓に際し、序文で評しています。

さらに、了翁禪師は多くの寺院修造を手がけ、勸学の徒を育て、靈薬「錦袋円」を庶民に施して困民救済にあたり、經典寄進に奔走した。道香禪師は、彼の生き方を世間全てが「菩薩の再来」とまで称えている、とも紹介しています。

了翁禪師の生涯は、少年期の大願発願以来その成就のための求道と実践にあつたと言えます。学究的生き方を求めず、参禅修行に勤めました。その結果として、文章力や読解にやや不案内な点があつたようです。

その点を、法兄の大随和尚は『開堂語録』の序文で、参禅を重んじ「吾が宗（黄檗宗）は悟處を貴びその餘は取らず」とし、問題外としています。そして、先人六祖大師を例に上げ、了翁禪師をして「文字を理せず、唯だ道、之を勤む」とし、その言説は「自己の胸襟より流出」したもので「純朴の意味」は「恰も一部の壇経を読むが如し。」と云い、「氷に鑊め、油に画く者」に等しい当代の学問僧の文言と比較して、「地と天となり。」と了翁禪師のもつ言葉の重さを説いています。

黄檗禅僧了翁禪師の足跡をたどつたとき、そこに見えてくるものは、求道と万民救済のために捧げた境涯です。江戸時代初期の一大変革期に、朝廷・幕府ひいては庶民に至るまでの幅広い信頼と尊崇を勝ち得たことは、私利私欲・富貴名利を超越して、「悟道」と「衆生済度」に徹し、不言実行したからにはかなりません。そこには、時空を超えた真の「人間」の在り様が示唆されているのではないのでしょうか。

湯沢の黄檗宗

■湯沢にあった長亨庵

了翁禪師が帰依した黄檗宗と湯沢の関係はどうだったのでしょうか。

享保十三年（一七二八）の湯沢絵図（湯沢市文化財）の東山寺の西側に黄檗宗長亨庵という寺院が描かれているので、この時代に湯沢にも黄檗宗が伝えられていたことがわかります。

そしてこの長亨庵の存在は、当時湯沢に住んでいた松井家資料によると、元禄から享保にかけてのおよそ四十年間であったようで、延享二年（一七四五）の黄檗宗末寺帳にはすでにその名はなくなっています。

また、この寺の開山として月耕の名が残されていますが、月耕は了翁禪師の師である松島の瑞巖寺（臨済宗）の雲居和尚の教えを受け、さらに宇治の萬福寺に上って第二代木庵にも仕えていますので、互いに知己の間柄でした。そして晩年は伊達藩の満寿寺の開山となりましたが、その塔頭（大寺院の敷地内にある小寺院や別坊）のひとつ三球院の開基は了翁禪師でした。



長亨庵本尊観音像
（湯沢市東山寺蔵）

したがって、湯沢の長亨庵の開山に月耕がなったのも了翁禪師の縁であることがわかります。

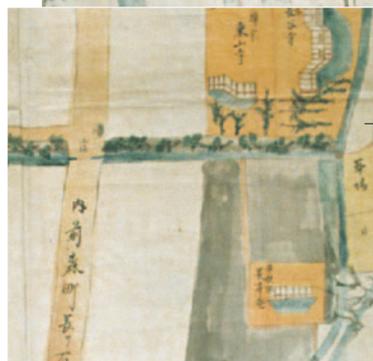
さらに、宝永二年（一七一〇）の長亨庵書物目録には合計百二十八巻の図書があったことが列記されていますが、そのなかに『高泉和尚録』と並んで『了翁禪師紀年録』と『月耕録』が含まれています。

なお、この『了翁禪師紀年録』の存在が、この地方の文献に再び登場するのは、これから百四年後の文化十一年（一八一四）、菅江真澄が八幡村を訪れてこれを読んで、地誌『雪の出羽路』に収録をしたときでした。

また、享保十四年（一七二九）の『諸道具覚』には本尊観音一体を東山寺に寄贈したことが記されていますが、この観音像は



享保十三年湯沢絵図
（左は長亨庵付近の拡大図）



今も東山寺に安置されています。

この観音像（白衣観音）の厨子には、元禄十一年（一六九八）松井彦五郎建立の銘文があつて、その美術史的様式は、中国の仏師範道生の黄檗様式を忠実に伝える県内唯一の仏像です。

このように湯沢に伝えられた黄檗宗は、了翁禪師の縁とその流れを汲むものであったということができます。

その後黄檗宗は急速に減少して、現在の秋田県内の黄檗宗寺院は、横手の三井寺のみとなりました。

了翁禅師の最期

ここでは、弟子の仁峯元善が目の辺りにした師の最期の様子を、伝記『天真院了翁禅師紀年録』から抄訳して、紹介します。

「宝永四年（一七〇七）五月半ば、了翁は多くの見舞客と常のように笑談した。また妄りに他人に心労をかけぬようにと言った。

十九日、出羽の郷里から了翁を慕い、出家を懇求してきた者がいた。師はききいれたが、数日來の断食で体がきわめて弱っていた。周囲は非常に心配したが、師は微笑して最期の出家の儀式であると言った。威儀を整え、ていねいに出家の式をすまされた。そして、法名を自分で書いて与えた。午後、いよいよ死期の迫ったことを告げた。

二十一日、了翁は、もはや薬食はいらぬと叱った。時に、弟子が遺偈（遺言の書）を乞うと、「要せず」といった。しかし、強いての願いに筆を受けると、一円相を画いて云く「咄咄 二十二日 了翁」と書いた。（注1、注2）それは偶然か予告だったのか、その通り、二十二日の早朝、やすらかに亡くなられた。享年78歳。

葬儀には、悦山和尚他多数の和尚、本山の僧達は勿論、京都の僧俗が甚だ多く参列した。翌日撒骨。得度した弟子五十余人。

生前、自分の物はほとんど周りに分け与えたので、最後に残ったのは、竹篋と古びた掛絡だけだった。（注3、注4）

ところで、弟子となった郷里出身の僧とは誰でしょうか。残念ながら今のところはわかりません。ただ、八幡には、弟子了口



一字一石塔経塚（湯沢市八幡字田中）

経石を埋めた上に碑が建てられています。表に「一字一石拜書 佛弟子」、裏に「法華塔」と刻まれています。昭和15年の調査によると表裏が現在とは逆になっていたようです。湯沢市史跡。なお、隣の新田集落にも経塚があります（下の写真）。

拜書と刻まれた了翁禅師の石塔や、隣りに一字一石塔経塚が残されています。

この経塚は、昔から貴重な言い伝えをもつていますが、刻まれた文字を子細に見てみると「竣工於正徳二年」（一七一二）とあり、了翁が亡くなった宝永四年（一七〇七）から五年後の建立であることがわかります。三百年もたっていますが、文献資料などが待たれるところです。

注1 一円相は禅宗で悟りの対象として描く円圈。絶対的真理、宇宙本来のあり様、一切空を表す。単に円相ともいう。

注2 咄は言葉に表せず、何も言えない様子。

注3 竹篋は禅宗で修行者の指導に用いる法具。へら型の竹に藤を巻き、うるしを塗ったもの。

注4 掛絡は禅僧が平素用いる略式の袈裟。



経石

了翁禪師の一切経寄進について

弘前大学人文学部准教授

渡辺麻里子

了翁禪師は、生涯において様々な偉業を成し遂げていますが、中でも、一切経の寄進は特に重要な意義があるでしょう。一切経（大蔵経とも）とは、お経の叢書、百科全書のごとく、「一切のお経」というように、あらゆるお経を集めたものです。

了翁は、十四歳の時、平泉の中尊寺で、紺紙金泥の一切経が散逸しているのを歎き、一切経の再集を誓います。この発願は、のちに行う諸寺への一切経寄進に発展するものです。しかし了翁は実現する財力も支援者も無く、断根や燃指という厳しい修行を行いながら、ひたすら仏に祈願しました。そんなある時、傷が癒えずに苦しむ了翁の夢に、長崎興福寺の黙子如定が現れ、薬の処方告げます。その薬を「錦袋円」と名付けて売ると万能薬として人気を博し、了翁は金三千両を手に入ることができました。この資金により、一切経寄進の誓願を実行していくのです。

まず第一の寄進は上野寛永寺でした。勤学講院を設立して僧侶の学問環境を整え、池中に経堂を建てて、天海版一切経を購入、寄進しました。

第二の寄進は、鉄牛道機の住する江戸白金瑞聖寺でした。稲葉正則を紹介して萬曆版（明版）一切経を購入、寄進

しました。この一切経は現在、東京大学附属総合図書館に所蔵されています。

第三の寄進は、高野山光台院になされました。第一の寛永寺、第二の瑞聖寺ともに江戸所在であったため、了翁は、大願の三蔵（三セツ）の残り一蔵を畿内・畿外に置きたいと願います。親しい真言宗の僧侶に相談して勧められたのが、高野山、中でも覚法法親王の開基で仁和寺の門主が差配する光台院でした。光台院でもまず経堂の建立を行います。現在の経堂は、建て替えられた二代目ですが、了翁の棟札は現在も残されています（写真①）。膨大な量の一切経を寄進するためには、まずそれを納める経蔵を立てたのです。



写真① 高野山光台院蔵・了翁建立の経蔵棟札

高野山光台院の寄進時には、鉄眼版一切経が完成していました。鉄眼版をなした鉄眼は了翁と同じ一六三〇年生まれで、生涯をかけて整版による一切経の出版を実現します。鉄眼版により、多くの寺院が一切経を置くことが可能となりました。了翁の一切経寄進は、高野山光台院以降、鉄眼版一切経が用いられます。

高野山光台院に寄進された了翁の一切経は、現在も、一冊も欠けずに護られています。冊子を開くと、了翁の詠

えた朱印が確認できます。二種あり、一つは寄進先を示した印で、光台院の場合は、「紀州高野山光臺院文庫」とあります（写真②）。またもう一つは了翁を示す「勤学法印」の印です（写真③）。



写真② 高野山光台院蔵了翁寄進一切経朱印



写真③ 了翁朱印「勤学法印」

さらに冊子の末尾には、了翁の一切経寄進の趣意が記された朱色の刷りが施されています（写真④）。この朱刷には、三蔵の一切経を寄進するに至る経緯が続いて、三蔵では学僧の勉強には不十分と考え、さらに十八蔵を寄進して合わせて二十一蔵（三宗各七箇巻）とし、学問する僧侶に役立つようにし



写真④ 高野山光台院蔵了翁寄進一切経・了翁朱刷

渡辺 麻里子氏プロフィール

1967年東京生まれ、千葉育ち。早稲田大学教育学部国語国文学科卒業。早稲田大学文学部大学院修士課程・博士課程修了。博士（文学）。博士論文は、『中世における談義書の研究』。現在は、弘前大学人文学部准教授。日本古典文学を担当。専門は、中世説話文学・仏教文学・仏教学・書誌学など。



〔参 考〕
・内山純子・渡辺麻里子『暁光山月山寺了翁寄進鉄眼版一切経目録』（月山寺、二〇〇一年）
・渡辺麻里子「高野山真別処蔵了翁寄進鉄眼版一切経について」（『黄葉文華』一三三、二〇〇四年七月）
・渡辺麻里子「了翁の一切経寄進について——叡山文庫生源寺蔵鉄眼版一切経と天台宗寺院への寄進——」（『山家学会紀要』九、二〇〇七年七月）
・渡辺麻里子「了翁禪師行業記について」（『アジアの文化と思想』一四、二〇〇五年二月）

たいという了翁の願意が記されます。そしてこの言葉の通り、以降、六十五歳までに、三宗二十一箇寺にわたる寄進を完遂させていくのです。

了翁が、生涯をかけて一切経を寄進したのは、仏法を守り弘めようという弘経の志によるものです。了翁の一切経寄進の意義を改めて考え、今に遺された了翁の一切経を、皆で大切にしていきたいでしょう。

了翁禪師年譜

西曆	年号	年齢	事項
一六三〇	寛永 七年	二歳	三月十八日、秋田県湯沢市八幡に生まれる。父鈴木氏、母永見氏。
一六三二	" 八年	四歳	母、死亡。同村の高橋家に養子となるが、養父母とも死亡のため、その後転々とする。
一六四一	" 十八年	十二歳	岩井川村龍泉寺の寺僕となり、齋藤自得のはからいで出家。
一六四三	" 二十年	十四歳	岩手県平泉の中尊寺に行く。仏教を正しく伝える大事な経文「紺紙金泥大藏経」の散逸を嘆き、近隣を探して六巻を返納してもらおう。大藏経収集の大願をたてる。
一六四四	正保 元年	十五歳	郷里の八幡神社に大願成就を祈願。杉苗五百余本を植える。
一六四七	" 四年	十八歳	山形県米沢亀岡の文殊堂に祈願する。
一六四八	慶安 元年	十九歳	松島の瑞巖寺雲居禪師から五戒を受ける。
一六四九	" 二年	二十歳	秋田の天徳寺に修行。群馬県隻林寺で百日間火食を断つ。江戸で托鉢その他労を惜しまず三両を得て父を見舞う。
一六五四	承応 三年	二十五歳	長崎にて隠元禪師に拜謁。
一六五六	明暦 二年	二十七歳	病軀をおして郷里に帰り、老衰の父を見舞う。
一六五七	" 三年	二十八歳	隠元禪師に参禅(摂津 普門寺)
一六六一	寛文 元年	三十二歳	隠元禪師宇治に黄檗山萬福寺を開く。了翁尽力す。
一六六二	二年	三十三歳	無明煩惱の根元を断とうとして断根。有馬温泉に養生五十日。

西曆	年号	年齢	事項
一六六三	寛文 三年	三十四歳	勝尾、長谷、清水の三寺で燃指の荒行。伊勢神宮などで祈願。
一六六四	" 四年	三十五歳	江戸の松平孝石宅で、夢中に如定和尚の霊薬を授かり、「錦袋円」と命名。
一六六五	" 五年	三十六歳	上野不忍池端に薬舗を開き、縁者大助に販売させる。
一六七〇	" 十年	四十一歳	売上げて三千両を蓄え、三百両で天海版大藏経を購入。寛永寺に寄進。不忍池に経堂島を造る。了然を改め了翁と号す。
一六七二	" 十二年	四十三歳	島に経堂や文庫を増設。和漢の書を講字者に利用させ、三聖の像を安置す。施薬五万五千余。
一六七三	延宝 元年	四十四歳	勸学寮を設立し、内典外典を集め、一大文庫を創設して、僧俗老少に利用させる構想を立てる。
一六七四	" 二年	四十五歳	台・密・禪の三道場に大藏経の寄進を発願する。瑞聖寺(鉄牛和尚)に経蔵を建てる。
一六七八	" 六年	四十九歳	台・密・禪三宗兼学の印可を受ける(長楽寺)。錦袋円の同業者から寺社奉行に訴えられる。
一六八二	天和 二年	五十三歳	勸学寮の土地を賜る。火災で一万余巻焼失。鉄眼遷化(53歳)。
一六八三	" 三年	五十四歳	大飢饉に千百余貫を施す。勸学講院経蔵の後に、剃髪師・雲居・両親・養父母・自得の五つの石塔を建てる。
一六八四	貞享 元年	五十五歳	勸学講院を建て講師を招いて講義を開始し、経庫をつくり、内外の典籍等三万余巻を納める。
一六八五	二年	五十六歳	学徒二五〇人余。後に僧俗六百余人という。文庫は付属図書館の役割。了翁の石像建立。
一六八五	" 二年	五十六歳	輪王寺宮より勸学院権大僧都法印に任ぜられる。高野山に鉄眼版一切経を寄進。その後、計一

西曆	年号	年齢	事項
一六八九	元禄 二年	六十歳	十一ヶ寺への寄進を誓願。
一六九〇	" 三年	六十一歳	天台山に講儒会を設ける。
一六九二	" 五年	六十三歳	伝承によれば、郷里の八幡神社に浄財を寄進して神社を再興。八神幡を奉納したという。
一六九四	" 七年	六十五歳	南禅寺濟北院を再興する。
一六九五	" 八年	六十六歳	大藏経全二十一蔵寄進を完遂。宇治黄檗山に登り天眞院を開く。
一六九七	" 十年	六十八歳	元旦に高泉和尚より法を嗣ぐ。臨濟三十五世了翁道寛となる。
一六九八	" 十一年	六十九歳	宇治五ヶ庄の灌漑開田工事。齋藤自得居士の恩に報いるため自得院を開創。
一七〇一	" 十四年	七十二歳	徳大寺を再興。大鐘を鑄造。翌年に丈六の観音像を造立し、半寸の小像三十三万三千三百三十三尊を施す。天眞院を元善にゆずり、自得院に入る。
一七〇二	" 十五年	七十三歳	仏国寺の財政面を補強し、大随和尚にゆずり、自得院に帰る。
一七〇五	" 二年	七十六歳	郷里八幡に帰り、「一字一石塔」経塚を造ったと言いつた。
一七〇四	宝永 元年	七十五歳	江戸の大火で勸学講院の類焼を聞き、再建の計画を申し出たが、幕府による再興と決まる。
一七〇六	" 三年	七十七歳	勸学講院内に客院を建て、了翁及び天眞院主永久の寓居とする。
一七〇七	" 四年	七十八歳	隠元禪師三十三回忌。悦山晋山法会に費用を喜捨。
一七〇七	" 四年	七十八歳	病をおして高泉和尚の国師号下賜の礼に江戸へ行く。
一七〇七	" 四年	七十八歳	江戸から宇治に帰り療養。仁峯元善に後事を託す。五月、郷里出身の某へ最後の得度の儀式を行い、五月二十二日遷化。



(8)

了翁様は、このほかに、江戸の大火事やききんのためにこまっている人たちのために大金を出し、救助活動を行ったり、亡くなった人たちのおそう式をしたりしました。さらに、川の工事や開拓工事をして、人々から生き仏さまと言われました。



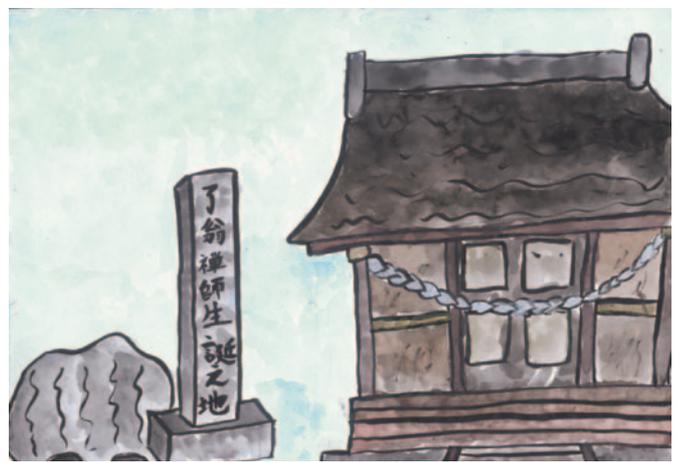
(9)

このようなお金は、錦袋円を売ったお金がたくさんあったのに、了翁様がぜいたくをしないでしょそにくらしていたからです。了翁様は、遠くへ出かける時も、馬やかごには乗らず、いつも修行そうの着るかんたんな衣を着て、食べ物もアワやヒ工などまずしい物ばかりでした。そしてたまったお金はすべて、大蔵経や本を買ったり、こまっている人を救ったりするためにつかったのです。



(10)

了翁様は、七十八才の時、死が近いのをさとって、断食を始めました。「死を覚悟したのだから、薬は、いらぬい。」と、医者や弟子のすすめをことわって宇治の小さなお寺で亡くなりました。了翁様は亡くなる前に衣類や、けさ、はきものなど身の回りの物すべてを弟子や友人、世話になった人たちに分けあたえたので、亡くなった時には弟子の教育につかうしっぺいと古びたけさだけしか残っていなかったそうです。



(11)

すばらしいお坊様として活躍した了翁様は、勸学講院の校長先生として「法印」という高い位をもらいました。また、上野の寛永寺には、りっぱな石像や石碑があります。生まれ故郷の八幡には若いころに修行した八幡神社や古いお経塚があります。

コラム

了翁さんの福神漬

カレーにつきものの福神漬は、了翁が考案したという伝承があります。

勸学講院では、寮生の食事のおかずとして、野菜の切れ端を刻んで漬けたものを出していました。これを食べた輪王寺宮が感心して「福神漬」と命名したというのです。

史実かどうかは別にして、たとえ野菜の切れ端でも無駄にしない、了翁の物を大切にする心や、質素な暮らしぶりを反映しているように思えます。湯沢市では、この了翁禅師の精神を大切にして、「了翁ゆかりの福神漬」として広く親しまれています。

コラム

了翁さんの名前

了翁さんには、物語のなかでは与茂治として親しまれていますが、12歳で出家した東成瀬村の龍泉寺は火災にあい、記録は残っていないので、幼名は明らかではありません。しかし、伝記「了翁禅師紀年録」（松尾寺蔵本）には、41歳の項に、「師始め了然と名のり、号を了翁と改む」とあるので、それまでは了然と称していたことがわかります。また、57歳の時に寄進した大蔵経には、了翁祖休とあるので、出家後の法名が祖休であったこととなります。やがて高泉和尚から法を嗣いだ元禄8年（1695）、66歳で法名が道覚と変わり、了翁道覚となりました。



(2)
お父さん、お母さんも優しい人で、一家三人で幸せに暮らしていましたが、よもじが二才の時、お母さんが急に死んでしまいました。その後、預けられた家でも、七才になった時、おそろしい病気がはやって家族がみんな死んでしまいました。そのために、「あの子は、不幸をまねく鬼の子だ。」という悪いわさが広まってしまいました。そして、ひきとってくれる人がいなくなってしまったので、お寺へ預けられることになりました。



(3)
よもじが十二才のとき、今の東成瀬村龍泉寺というお寺に預けられました。でも、よもじは「あら、ぼうずになるのは、いやだ。」とっていうことをききませんでした。そこで、この寺に出入りをしていて、さいとうじとくという人が「よもじ、お坊様というのは、医者だ。苦しみ悩んでいる心を直してくれるからだ。」と説得して、よもじはお坊様になりました。名前を了然としました。



(4)
了然が十四才の時、修行に出かけました。とちゅう、今の岩手県の中尊寺によって貴重な大蔵経がわずかしが残っていないことを知り、「よし、自分は一しかかっても大蔵経を集めよう。」と決心しました。そして、そのまま日本のいろんな所を修行しながら歩き、想像できないほどのきびしい修行にたえました。



(5)
了然が三十五才の時、大蔵経の資金を集めるために江戸に行きました。しかし修行中にいためた体の傷が痛んで苦しくて托鉢を続ける事ができなくなりました。「願いがかないますように。」と、必死にいのり続けていると、ある夜、夢の中に了然が尊敬しているお坊様があらわれて、「安心なさい。痛みをとめる薬を教えませうから、大願をかならず成就なさい。」とお告げがありました。了然が教えられたとおりの薬をつくって傷につけてみると、痛みが消えて傷あともきれいになりました。



(6)
了然は、この薬を傷の痛み苦しんでいる人に分けてやりたいと思い、この薬に「錦袋円」と名づけ、上野のしのばずの池のほとりに店をだして薬を売り出しました。この薬は飛ぶように売れました。了然は売るだけでなく、まずいい人には無料であたえました。こうして店を開いて六年目、了然が四十一才の時、早くも三千両という大金を集めました。そして、そのお金をつかって、念願の大蔵経を買うことができました。また、了然は、願いをかなえた記念に名前を了翁と改めました。



(7)
また、了翁様は集めたお経や本を人々に自由に読んでもらおうと、今の図書館のような場所を作りました。そこでは、勉強好きでもまずいい人のために、食べ物をおもてなしもしました。そして了翁様が、五十五才の時、「勧学講院」という学問所を建て、そこで勉強した人々からは、数多くのすぐれた人が出ました。



(1)
了翁様は、今から四百年近く前のかんえい七年三月十八日、出羽国雄勝郡八幡村、いまの湯沢市八幡に生まれました。お坊様になる前の名前をよもじといたしました。

紙しばい「了翁さまものがたり」について

この紙芝居は、平成14年に湯沢市立湯沢北小学校の五年生児童たちが、郷土の偉人である了翁さまが、どんな人だったのか？どんなことをしたのか？を学習し、それをみんなにわかりやすく伝えようと、制作されたものです。

内容のもととなったのは、平成6年に湯沢市制40周年記念事業として出版された絵本『湯沢が生んだ名僧 了翁さま』(田口大師・文/小松脩一・絵)です。この絵本の絵と文章を使用した紙芝居も制作されていますが、ここでは小学生たちの目をおした「了翁さま」をご紹介します。

制作・湯沢市立湯沢北小学校

五年生(当時)
伊藤 歩子さん
佐藤 朋美さん
高橋 知里さん
長瀬 由紀子さん
村上 佳穂さん
由利 佳美さん
指導・佐藤 順子先生

※ なお、内容の一部に本冊子の記述と相違する部分もありますが、了翁禪師については、さまざまなお説や伝承があることをご理解ください。



『湯沢が生んだ名僧 了翁さま』

この冊子は、了翁禪師没後三百年記念事業の一つとして刊行しました。この冊子が示すように、了翁禪師は大乗仏教の教えである利他行を身をもって実践した人として、早くより菩薩の再来と讃えられました。しかしながらその業績と存在については、故郷はもちろん、日本史的にも埋もれた存在でした。そこで禪師没後三百年を機に、この埋もれた史実を掘り起こし、その業績を顕彰して郷土や全国の人々に了翁禪師の存在を伝えることにより、豊かな郷土の資となれば幸いと存じます。

了翁禪師の生涯は利他行の三字に尽きますが、本末寺・檀家制度のもとで一宗派に固執する当時の仏教界では、その宗派の枠を超えた教学の必要を説くという仏教刷新運動の実践者でもありました。この二つの点は、時空を超えた了翁禪師の心として広く学びたいものです。

なお、この冊子編集にあたっては、可能な限り原典を探り、地元幡野地区の伝承にも配慮し、市民の学習と研究者の便を図りましたが、まだまだ不十分と存じます。

最後に萬福寺、寛永寺、中尊寺、その他の関係諸寺院、弘前大学渡辺麻里子氏、関東天台壇林内山純子氏、湯沢北小学校のみなさんをはじめ、多くの方々のご指導とご協力に深く感謝申し上げます。

(編集委員長 伊藤 正)

了翁禪師没後三百年記念事業実行委員会

了翁禪師没後三百年記念誌編さん委員会

委員長 伊藤 正
委員 高久 正吉
鈴木 郁朗
富谷 弘
高橋 三男
山内 信弘
(教育委員会 生涯学習課)

事務局 柴田 英助
(企画調整部 総合政策課)